

連用形とテ形について

生 越 直 樹

一、本稿の動機・目的

筆者は韓国の大学で上級作文の授業を担当したことがある。学生たちの書いた作文の中には、誤りや自然さに欠ける表現が多くあった。その中でも気になったのは、学生たちが節(句)と節(句)を結びつけるときに、もっぱら「しして」といういわゆるテ形を使い、「し」という連用形をあまり使っていないことであつた。

表一は、学生たち(主に日本語専攻の大学二・三年生)が作文で用いた接続形式について、その使用頻度を調べたものである。調査した資料は、四〇〇〜六〇〇字程度の文章、延べ二二三名(異なり七二名)分である。学生たちの中には、数年間から二十年近く日本に居住した経験を持つものが二二名おり、彼らの日本語能力は、若干ばらつきはあるものの、未経験者に比べてはるかにすぐれていた。そのため、表一では居住経験者と未経験者を別に示してある。さらに、参考として、井上和子(一九八三)で示された資料も合わせて示しておく(表二)。井上(一九八三)の資料は、新聞に掲載された四九三文からなる随筆評論を用いたもので、くだけた書き言

葉の資料として示されている。

これらの表を見ても、韓国大学生がテ形を多く使いすぎること、その反面連用形の使い方が少なすぎるがよくわかる。このことがなぜ問題かという点、テ形を多く使いすぎることによって文章がわかりにくくなってしまふのである。たとえば次のような例がある。

(1) 一九八八年のオリンピックを通じて量的にたいへん発展してソウルを中心として大部分の都市が先進国並みになっているだろう。

(2) 国民の生活水準が高くなってスポーツなどに関心が高まってレジャー産業が発達して、

これらの文を読んでわかるように、テ形を連続して使うと、文全体の意味が非常にわかりにくくなる。連続して使わないまでも、テ形ばかりを使って連用形を使わない文章は、意味をつかむのに苦労する。作文で重要なのは、自分の言いたいことを正確に読む人に伝えるということであるが、テ形の多さと連用形の少なさが、その妨げとなるのである。

項目	出現数	頻度%
「て」	107	27.0
連用接続	84	21.3
「が」	45	11.4
「ば」	24	6.1
「と」	16	4.1
「から」(理由)	14	3.5
「ながら」	13	3.3
「たら」	12	3.0
「ても」	10	2.5
「ので」	9	2.3
「から」(時)	6	1.5
「けれども」	6	1.5
「たり」	6	1.5
「ように」	5	1.3
その他	38	9.6
総計	395	100.0

表2 随筆評論における接続形式の使い方
井上(1983)より

接続形式	居住未経験者 延べ174名			居住経験者 延べ59名	
	出現数	頻度%	誤用数	出現数	頻度%
連用形 テ(する)し ながら	167	12.2	11	137	23.5
	408	29.8	110	114	19.6
	76	5.5	25	22	3.8
	27	2.0	2	12	2.1
か ら の で た め (に)	124	9.0	15	31	5.3
	47	3.4	14	25	4.3
	40	2.9	0	21	3.6
と ば た ら	121	8.8	26	50	8.6
	98	7.1	13	38	6.5
	30	2.2	2	14	2.4
が け れ ど も	120	8.8	4	72	12.4
	34	2.5	0	11	1.9
	46	3.4	2	20	3.4
その他	33	2.4	10	15	2.6
総計	1371	100.0	234	582	100.0

表1 韓国人学生の作文における接続形式の使い方

学生たちがテ形を多く使う原因は、彼らが連用形の使い方を十分教えられていないためだと思われる。授業では話し言葉を中心に教えるため、テ形の使い方は教えても、接続形式としての連用形はほとんど教えない。また、朝鮮語にはテ形とよく似た用法を持つ「a」[ko] という接続形式があり、{a} [co] をすべてテ形に置き換える傾向があることもその一因であろう。

以上のようなことから、学生たちにわかりやすい文章を書かせるためには、書きことばにおける連用形の使い方をしっかり教える必要がある。そのためには、まず連用形とテ形の使い方の違いをはっきりさせておかなければならない。ところが、このことについては、今までのところあまりはつきりしたことがわかっていない。そこで、本稿では、書きことばにおいて、連用形とテ形がどのように使い分けられているのかを考えてみたいと思う。なお、連用形・テ形の否定形については、形態的にさらに複雑になるので、今回は取り上げないでおく。

二、従来の研究

従来の研究では、連用形はテ形とひとまとめにされ論じられることが多い。そのため、連用形そのものについての研究、あるいは連用形とテ形の違いについて述べた研究はきわめて少ない。その中で、両者の違いについて触れたものとしては、寺村秀夫(一九八一)がある。寺村(一九八一)は、並列的接続の形として連用形とテ形を取り上げ、二つの形の違いについて次のように述べている。

(a) 文体的に、連用形のほうが書きことば的で、テ形のほうが話しことば的である。

(b) テ形のほうが継起的な感じが強い。一つの事が終って、すぐ次のことが継続する感じである。

(c) 別々の事象を全く並列的に並べるのには、連用形のほうが適している。

(d) テ形は理由・反通念(逆接)・手段を表すことがあるが、連用形にはそのような使い方がない。

(e) テ形には丁寧体「くしまして」「くして」という形があるが、連用形にはない。

(a) の文体的な差については、井上(一九八三)が各種資料をもとに検証を試みている。その結果、「連用接続は「形式ばった書きことば」に、「て」接続は口語体の特徴的なものと言うことができる」と結論づけている。これら寺村(一九八一)の考察は、「二つの形の使い方を把握する上で大いに参考になるものである。しかしながら、結論が抽象的で、実際に外国人学生に教えるには、十分なものとは言いがたい。特に、(d)のように文の意味で連用形とテ形の違いを説明する場合には問題がある。たとえば、実際のテ形の文において、それが継起を表しているか、理由や手段を表しているかを判断するのは容易ではない。これは、寺村氏や他の研究者も述べているように、テ形の表す意味はテ形自体にそういう意味があるというより、前後の意味関係からそう解釈できるように意味があるという。したがって、このような基準は、外国人学習者にとって一つの目安

にはなるものの、実際にはかなり不十分なものと言わざるをえない。また、これまでの研究では、論者の作例をもとにして考察が行われているが、実際の用例にあたってみることも必要であろう。

本稿では、新聞のコラムや小説から採った用例をもとに、連用形とテ形の使い方の違いをより詳しく示すことができないか考えてみたい。

三、前件と後件の時間的關係

連用形・テ形について考察するためには、それらの文における先行する部分(前件)と後続する部分(後件)の關係について考える必要がある。

寺村(一九八一)は、連用形・テ形の文における前件と後件の時間的關係について、前件の表す時は後件の表す時と同じか前であると述べている。今回採集した用例にも、このことをくつがえす例は見つからなかった。したがって、連用形・テ形の文は、前件と後件の時間的關係から大きく二つに分けて考えることができる。一つは前件と後件が同時に起こる(存在する)場合、もう一つは、前件が後件より以前に起こる(存在する)場合である。ここでは、前者を同時的用法、後者を継起的用法と呼ぶことにし、前件と後件の時間的關係を軸にして考察を進めることにする。

三、一 同時的用法について

特定の時間と結びついていない場合

連用形・テ形の同時的用法には、前件と後件がある特定の時間と結びついている場合とそうでない場合がある。まず、特定の時間と結びついていない場合から見ていくことにする。最初に連用形の例をいくつか挙げてみる。

(3) 映画に出てきたギョオスという怪獣はコウモリ科に属し、身長六十五メートル、とがった頭と大きな口を持っている。〔天6〕

(4) ピカソは、南スペインのマラガで生まれ育った。そこはアンダルシア地方といわれ、コスタ・デル・ソル（太陽の海岸）という愛称がある。〔天8〕

(5) そしてそこに添えられている写真を見た。そぐわない感じの背広を着た四十六歳の男の顔が映っている。シベリアの苛酷な抑留生活を物語るように、頬の肉が削げ落ち、眼の下に窪みが出ていたが、〔不〕

(6) ピカソは、南スペインのマラガで生まれ育った。そこはアンダルシア地方といわれ、コスタ・デル・ソル（太陽の海岸）という愛称がある。真つ青な空が緑色の地中海に溶け、はるかに望むアフリカ大陸から、砂漠の風が吹いてくる。〔天8〕

右の例のうち、(3)(4)では文中に主題となる語が含まれている。これに対し、(5)(6)では文全体のテーマというべきものが、文中にはなく文脈によって示されている。たとえば、文脈から(5)では「男の顔」、(6)では「南スペインのマラガ」が文全体のテーマになっていることがわかる。このような違いはあるものの、(3)～(6)の文は、いずれも主題・テーマの持つ特徴を列挙した文であり、その点では共

通した性格を持っている。

一方、テ形にもこれとよく似た用法がある。たとえば、次のような例である。

(7) 平気で話題にしえたのは、現在、主婦の座にあって、自信をもつ五十歳くらいまでの女性であろう。〔天6〕

(8) 大学生や若者の中に、このごろ目立つ一つのタイプがある。(中略) みなりからいうと、あたまをドライヤーでいつもセットして、黒か焦茶系統の背広を着ている。〔天6〕

(9) 週末の大通りからの自動車締め出し作戦のほかに、もうひとつのニューヨーク方式がある。五番街のような大通りには一區画ごとに歩行者専用信号があつて、その信号が赤でも、構わずに道路を横断している。〔天7〕

(7)は文中に主題が含まれている例、(8)(9)は文脈によってテーマが示されている例である。これらテ形の文と(3)～(6)の連用形の文を比べると、主題・テーマに対する前件・後件の係わり方が異なることに気づく。連用形の文では主題・テーマ||前件または後件であり、前件・後件は独立して主題・テーマと結びついている。これに対し、テ形の文では主題・テーマ||前件+後件であり、前件・後件二つ合わせて初めて主題・テーマと結びつく。つまり、連用形の文では、前件と後件はそれぞれ独立して成立しており、いわば「前件そのほかに後件」という関係になっている。一方、テ形の文では、前件・後件の一つでも欠けると文の意味が成り立たなくなってしまうことから、前件と後件は一体となって成立していると言える。この

場合、前件と後件は「前件かつ後件」の関係にある。

たとえば、(6)と(9)を例にとつてみる。(9)の場合、「信号がある」ことと「信号が赤でも道路を横断している」ことは、単なる特徴の一つではなく、この二つの特徴が同時に成立することがまさに「ニューヨーク方式」を意味する。つまり、他ならぬこの二つのことが重要なのである。その点で、(9)のような文は、「(前件+後件)は(主題・テーマ)だ」という関係にあり、主題・テーマに対する定義づけの文とも言えるだろう。ここでは、(7)～(9)のようなテ形の用法を「テーマ定義づけの用法」と呼んでおく。一方、(6)の場合、「空が地中海に溶けている」ことも「砂漠の風が吹いてくる」ことも「マラガ」の特徴の一つであるのみで、それによって「マラガ」を定義づけるものとはみなされていない。この点でテ形の文とは明らかに異なる。

ただし、テ形の文の中には、テーマ定義づけの用法とは言えないものもある。

(10)怪獣ならぬ快獣ブースカというの¹いて、ひどく利口になるか
と思うとたちまち知能指数ゼロになる。〔天6〕

右の文では、前件であるものを提示し、後件でそれについて説明している。しかしこの例でも、前件が欠けると文が成立しなくなり、前件と後件の一体性ということでは、これまでのテ形の文と同じである。

ところで、(7)～(10)におけるテ形は、従来は並列・対比を表すとされる。しかしながら、これまで見てきたように、これらの文は前件

と後件を並列・対比することに主眼があるのではない。前件と後件が同時に成立するところに主眼があるのである。このことは、従来逆接を表すとされているテ形の文にもあてはまる。

(11)おとしの秋、(中略)三時間ほど銀座通りの車の流れをとめたことがあった。銀座八丁、三十万人もの人手になって、しかも不思議に通りはしんとしていた。〔天7〕

右の文においても、前件だけあるいは後件だけでは意味を持たず、前件と後件が同時に成立していることが重要なのである。逆接を表すとされる場合、前件・後件に共通の主題・テーマがあるのが普通なので、これもテーマ定義づけの用法の一種と言えるかも知れない。

特定の時間と結びついている場合

次に、同時的用法のもう一つの場合、前件と後件がある特定の時間と結びついている場合について考えてみる。まず連用形の例を挙げてみる。

(12)ピカソは九十一歳で世を去るまで、絵を作り、絵をこわしつづけた。〔天8〕(括弧内は筆者の補充、以下同様)

(13)この夏の銀座はどうか。どんな風俗が大通りに現れるか。いつとき大気は澄み、樹々の緑はもえるだろうか。〔天7〕

(14)フグに似たウマヅラハギという魚が、日本近海で大発生したというニュースもあった。ある専門家は「汚染でエサがふえたからだ」といい、他の専門家は「海がきれいになったからだ」という。〔天8〕

一方、テ形にも次のような例が見られる。

(5) 発車前のホームで、ぐるりと人垣に囲まれて、転任の人物が手持ちぶさたに立っている。(「天6」)

(6) 二・三日前、ジャカルタのムルデカ宮殿近くの広場で開かれた学生大集会で、学生は宮殿に向かって、スカルノ大統領ののしる歌をうたったそうだ。(「天6」)

(7) むかし炭鉱で、抗夫がよくカナリアを持って抗道にはいった。

(「天7」)

(2) (7)の文は、いずれもある時点での状態・動作を表しているが、連用形の文(2) (4)とテ形の文(5) (7)では、表している状況が異なる。テ形の文が表しているのは、主体についてのある一つの状態あるいは動きであり、前件と後件が別々に独立して成立しているわけではない。たとえば(6)で、「向かう」という動作と「うたう」という動作は別々に成立しているものではなく、これらは一つの動きにおける二つの要素ともいうべきものである。したがって、この場合も、前件と後件は一体となって成立しており、「前件かつ後件」という関係が成り立つ。

これに対し、連用形の文では、前件と後件は別々に成立する二つの状態・動きを表している。たとえば(4)では、「ある専門家がいう」とことと「他の専門家がいう」とことは別々に独立して成立している。したがって、この場合もまた、前件と後件は「前件そのほかに後件」という関係にあると言える。採集した用例をみると、(2)や(4)のように前件と後件の述語が同じあるいは相反する語の場合、テ形は使わ

れず、連用形が使われている。これは、そのような場合前件と後件を一つの動きの二つの要素とはみなしにくいからであろう。また、この種の用法のテ形の文では、前件と後件の主体が同じか、(6)のように前件の主体がないあるいはあいまいである(「学生が宮殿に向かう」とすると別な意味になってしまう)。これも、前件と後件の主体が別では一つの動きとみなしにくいためと考えられる。

ただし、用例の中にはなかったが、テ形の文でも前件と後件が独立した別々の動作を表す場合がありうる。

(8) 主任が山口へ行つて、係長が広島へ行つた。

この種の文が現れうるのは、文脈においてあるテーマ(二人の行き先)などが設定されている場合であろう。テーマ定義づけの用法の一種と考えられる。このように、テーマ定義づけの用法の場合、通常テ形が使えない条件下でもテ形が使える。これについては次のように考えられる。テ形の文の中でも(10)や(15) (17)では前件と後件そのものがお互い密接な関係にあり、前件と後件が一体となって成立するのは両者の内容そのものによっている。ところが、テーマ定義づけの用法である(7) (9)や(11) (8)では、前件と後件自体にはそれほど密接な関係はなく、主題・テーマによって初めて前件と後件が密接に結びつけられる。つまりこの場合は、テーマ主導によって前件と後件の一体性が示されているといえよう。そうすると、前件・後件は主題・テーマに関係するものならなんでもよいということになり、(8)のような文も可能になるものと思われる。

「」までのまとめ

ここまでのことをまとめておく。

① 同時的用法における前件と後件の関係

- ・ 連用形の文における前件と後件は、それぞれ独立して成立する。(前件そのほかに後件)
- ・ テ形の文における前件と後件は、一体となって成立する。

(前件かつ後件)

② 前件・後件が特定の時間と結びつかない場合

- ・ 連用形の文は、主題・テーマの持つ特徴の列挙を表す。
- ・ テ形の文は、前件と後件が同時に成立することに主眼があり、しばしば主題・テーマに対する定義づけの意味を持つ。

③ 前件・後件が特定の時間と結びつく場合

・ 連用形の文では、前件と後件は独立した別々の状態・動きである。

- ・ テ形の文では、前件と後件は一つの状態・動きの異なる二つの要素であり、別々に独立したものではない。ただし、テーマ定義づけの用法の場合は、このことに関係なく用いられる。

三、二 継起的用法について

前件と後件の時間差

次に、連用形・テ形の継起的用法について考えてみる。両者の連いでまず目につくのは、時間を示す語と前件・後件の関係である。連用形の文では、時間を示す語などによって、前件と後件の起こる時

間の違いが明示されることが多い。いくつか例を挙げてみる。

①9 白蓮は柳原家の一室にとじこめられ、大震災のあと、ようやく宮崎電介といっしょになる。〔天6〕

②0 盲目となり、くる日もくる日も白をひかされるサムソンは、やがて髪がのびて怪力をとりもどす。〔天6〕

②1 知里博士は一九〇九年(明治)に北海道胆振国の幌別村(現在幌別町)に生まれ、登別で育った。〔殺〕

②2 (彼女は)二度の結婚に失敗し、三度目の夫、インド人のブラジェン・シン氏とわずか二年で死別している。〔天6〕

①9 ②0 では時間を示す語が後件のみにかかり、②1 では逆に前件のみにかかる。②2 では前件・後件それぞれに起こる時間が示されている。連用形の文の中には、このように時間を示す語の存在によって、前件と後件の時間差を知ることができるものがある。

一方、テ形の文では、時間を示す語が前件あるいは後件のみにかかることは少なく、あってもそれが前件と後件の時間差を示すことにはならない。たとえば次のような例がある。

②3 一言でいえば、彼らは「日本にたいへんガッカリして」来週帰国する。〔殺〕

②4 し、また、こんな時こそ時間前に出勤して、忠誠心のあかしを立てたいサラリーマン心理もあるだろう。〔天7〕

一時間を示す語が、②3 では後件に、②4 では前件にかかっている。しかしながら、これらの文の前件と後件は別々の独立した動きではない。②3 の前件は後件の付帯状況のようなものであり、②4 では、前件

の行為をすること(「時間前に出勤すること」)がすなわち後件(「忠誠心のあかしを立てること」)を意味するのである。つまり、これらの文は、前件と後件の間に時間差がない同時的用法の文であると考えられる。

では、テ形の継起的用法というのはいかほどのものか。まず例を挙げてみる。

例)パトカーが露地に入る。千鳥足の男が、わざと道をあけない。

(中略)パトカーをおりて神浜巡査は男に言った。(天6)

例)「T会館ですぞね？」関野が念を押すと、先方は、そうだ、と答えて電話を切った。(眼)

例)の場合、前件と後件は連続して起こっており、その時間差はごくわずかである。これらの場合、例のような例もあることから、前件の動作による結果状態が後件のとくも存在しているか否かは問題ではなく、前件と後件の連続性自体が重要なようである。そうすると、連続した一連の動きという点で、これらの場合の前件と後件も一体性を持つていことになる。なお、同時的用法の場合と同様、テーマ定義づけの用法ならば、前件と後件の時間差がはっきりしていてもテ形が使えるようである。

以上のことから、前件と後件の時間差がはっきりしているときには連用形が使われ、前件と後件が連続的であるときにはテ形が使われると言つてよさそうである。ただし、前件と後件の時間差がはっきりしているとみるか、連続的であるとみるかは、全く作者の気分によるため、両者の間に明確な線を引くことは不可能である。した

がって、文中に時間差を示す語がある場合を除いて、連用形とテ形の使い方を具体的に示すのはむずかしい。

なお、連用形の文についていえば、時間的差がはっきりしているということは、それだけ前件と後件の独立性が高いということになる。これは、同時的用法での連用形の文の特徴と一致する。同時的用法の連用形が、主題・テーマについての特徴・状況を空間的に列挙するものとするなら、継起的用法の連用形は、主題・テーマについての特徴・状況を時間的に列挙するものと言えよう。

前件と後件の因果関係

ところで、テ形の継起的用法には、もう一つ前件と後件に因果関係がある場合がある。次のような例である。

例)原爆で無残に傷ついたあと、二十二年の風雨にさらされて、広島
島の原爆ドームがいまにもくずれ落ちそうな状態になった。

(天6)

例)この外報面記事で氏の消息を知つてほつとしてゐる愛読者が多いだらう。(天7)

この種の文では、感情に関係する動詞・形容詞が後件の述語になることが多い。例)の「ほつとしてゐる」や「感嘆する」「ぞつとする」「うれしい」のほか、「涙を流す」「笑う」など感情的な動作もこの種の語といえるだらう。例)のような場合、連用形でも言えそ
うな気がするが、実際の用例を見ると、この種の動詞・形容詞が後件の述語となる例はほとんどない。感情の原因である前件と、その結果としての感情を表す後件は切つても切れない関係にあり、

その二つがあわさって初めて一つの出来事が表現されるといえる。感情に關係する文においてテ形が使われるのは、この前件と後件の一体性のためである。

同様のことが次の例にもいえる。

④ 一国が輸入制限をやると相手国が報復して、他国にも連鎖反応を起す。〔天?〕

⑤ 暗青色の部分が山頂から縦縞を描き、それが山全体をいっそう峻険に見せていた。〔W〕

⑥ の場合、前件全体が後件にかかっており、後件はそれだけでは独立した文にならない。前件と後件が一体となって初めて文が成立するのである。これに対し、連用形が使われている⑦では、前件全体を後件の「それが」が受けており、前件と後件はそれぞれ独立した文になる。今回採集した用例では、⑧のように前件全体が後件にかかる場合には、すべてテ形が使われていた。

ここまでのまとめ
以上述べてきたことをまとめると、次のようになる。

④ 継起的用法における前件と後件の關係

・連用形の文では、前件と後件は時間的間隔をおいて起る。
したがって、文中に前件と後件の時間差を示す語があるときは、連用形が用いられる。

・テ形の文では、前件と後件は時間的間隔をおくことなく連続して起る。ただし、テーマ定義づけの用法の場合は、このことに關係なく用いられる。

⑤ 前件と後件の間に因果關係があり、後件の述語として感情に關係する動詞・形容詞が使われるときには、通常テ形が用いられる。

⑥ 前件全体が後件にかかるときには、テ形が用いられる。

四、まとめ、および残された問題

連用形とテ形の使い方の違いについては、すでに各節の終りにまとめておいた。ここでは、これまで見てきた連用形・テ形の用法を簡単にまとめて示しておく。

〔連用形〕

* 同時的用法 —— 空間的列挙

* 継起的用法 —— 時間的列挙

〔テ形〕

* 内容（前件・後件）自体による一体性

同時性（様態など）

連続性（継起）

因果性（理由）

* 主題・テーマによる一体性

——（テーマ定義づけ）

テ形の用法を理解するには、内容による一体性と主題・テーマによる一体性を区別して考える必要がある。従来は、この点が十分認識されていなかったように思われる。

また、本論では触れなかったけれども、連用形が一音節になる動

詞(「見る」、「来る」など)が前件の述語になるとき、テ形が使われるのが普通で連用形が使われることはほとんどない。使い方を考える際には、このような形態的な点にも注意する必要がある。

以上、これまでの考察で、ある程度連用形とテ形の使い方の違いを明らかにできたと思う。しかし、外国人学習者に対して教えるには、さらに具体的なルールにして提示する必要があるだろう。この点については今後の課題としたい。

また、今回は、一つの文の中で連用形・テ形が一回だけ用いられる場合に限定して考察をおこなった。これは、連用形とテ形の基本的な違いをまず把握するためであった。しかしながら、実際の文章では、一つの文中で複数の連用形・テ形が交互にあるいは連続して用いられている。まだ調査中であるが、一つの文中で一回だけ用いられる場合と、何度も用いられる場合では、二つの形の使い方に差があるようである。また、他の接続形式との関係も重要である。前後にどういう接続形式がくるかということも、連用形とテ形の使い方に影響を与えるようである。これらのことについては、別の機会に改めて論ずるつもりである。

新刊紹介

峰岸明著『平安時代古記録の国語学的研究』

本書は、変体漢文で記された平安時代の古記録の文章を可能な限り厳密な方法で解説し、平安時代の言語の研究に役立てようとする。その実践を試みたもの。全体、三部か

序章 記録語研究の構想
第一部 記録語表記の基盤とその解説方

主要参考文献

井上和子(1988) 『ess 文の接続』講座 現代の言語1 日本語の基本構造』三省堂

生越 直樹(1987) 『日本語の接続助詞「て」と朝鮮語の連結語尾

{a} [ko]』『日本語教育』62 日本語教育学会

久野 暉(1973) 『日本文法研究』大修館書店

寺村 秀夫(1981) 『日本語の文法(下)』国立国語研究所

森田 良行(1986) 『基礎日本語2』角川書店

用例出典名

〔天6〕『天声人語6』入江徳郎 朝日文庫 1981

〔天7〕『天声人語7』疋田桂一郎 朝日文庫 1981

〔天8〕『天声人語8』深代惇郎 朝日文庫 1981

〔殺〕『殺される側の論理』本多勝一 朝日文庫 1982

〔不〕『不毛地帯』山崎豊子 新潮文庫 1983

〔眼〕『眼の壁』松本清張 新潮文庫 1971

〔W〕『Wの悲劇』夏樹静子 角川文庫 1984

(おこし・なおき 横浜国立大学)